

ワーズワスと科学的精神

佐々木幸子

<目次> 序

- I ワーズワスの「科学批判？」
 - II *The Prelude* と科学
 - III “Preface” と科学
 - IV ワーズワス詩中の科学的要素
 - V 科学的要素とワーズワスの「自然」
 - VI 自然の法則と人間の生
- 結 び

序

イギリス・ロマン派詩人たちが活躍した 18 世紀後半、近代科学の急速な進歩は、神話や伝説の虚構性を暴露し、自然を「中性化」することによって、結果的に詩を衰退させ、滅ぼしてしまうであろうというのが、一般的な見方であった。⁽²⁾従って、科学と詩は、その性質上、互いに敵対するものとみなされ、ロマン派詩人達も、想像力を制限する暴君としての科学を、非難、攻撃している。代表的なのは、John Keats (1795—1821) で、彼は“Lamia” (1820) の中で、科学を「冷たい哲学」と呼び、次のように告発している。⁽³⁾

Do not all charms fly
At the mere touch of *cold philosophy*?
There was an awful rainbow once in heaven :
We know her woof, her texture; she is given
In the dull catalogue of common things.
Philosophy will clip an Angel's wings,
Conquer all mysteries by rule and line,
Empty the haunted air, and gnomed mine —
Unweave a rainbow, as it erewhile made
The tender-person'd Lamia melt into a shade.

(Pt. 2, 11. 229-38. イタリックは筆者)

William Wordsworth (1770—1850) の場合も、当時進歩の著しかった科学には、批判的であるというのが大方の見方である。ロマン派詩人の中でも、とりわけワーズワスは、「自然詩人」として有名であるため、その感が強いように思われる。イングランド北部の湖水地方 (The Lake Destrict) の美しい自然を愛したワーズワスが、その愛する自然を冷たく分析、解剖し、抽象化しようとする科学を好むはずがないという訳である。

例えば、A. N. Whitehead のように、ワーズワスは、「科学嫌い」のために、

明確な「証拠立て」に欠けるという批判もあれば――

He(=Wordsworth) weakens his evidence by his dislike of science. We all remember his scorn of the man of peeping and botansing on his mother's grave . . . his characteristic thought can be summed up in his phrase, 'We murder to dissect.'⁽⁴⁾

――Douglas Bushのように、ワーズワスが思考形能や感情面に関してさえ、「非科学的」であったという指摘さえある。

Wordsworth's thought or feeling is altogether non-scientific and is not concerned with evidences of design⁽⁵⁾

ところが、ワーズワスの詩には、しばしば科学への言及や賛辞が見出され、また、科学用語や幾何学的描写と思われるものが、かなり登場している。こうした事実は、大方の批評家の否定的捉え方とは、相反するものであるように思われてならない。そこで、ワーズワスは科学に対して、実際どのように考えていたのか、そして、どの程度、科学的要素がワーズワス詩に入っているのかを探り、それを通して、詩人ワーズワスの特質を、明らかにしていこうと思う。

I ワーズワスの「科学批判？」

まず、ワーズワスが科学を批判しているとして、よく引き合いに出される“The Tables Turned” (1798) と “A Poet's Epitaph” (1798) について考察することから始めたいと思う。

“The Tables Turned” には、確かに「もう沢山だ」とする対象に、「科学」があげられている。しかし、この言葉は、「科学」ばかりでなく、「芸術」に対しても言われている言葉である。

Enough of Science and of Art ;

Close up those barren leaves ;

(st. 8)

さらに、この詩全体のコンテキストで考えると、決して科学や芸術が、全面的に攻撃されているのではないことが、明らかになる。科学や芸術に対する言及は、その書物に対する言及である——上の引用でも、「科学と芸術」は「そうした不毛の本」(“those barren leaves”)と言い換えられている——そして、活字になった人間の叡知を学ぶことよりも、実際に自然に触れ、体験することの方が、はるかに有益である——「自然を教師にせよ」(“Let Nature be your Teacher”) (st. 4) ——と説く。

Up! up! my friend, and quit your books,
Or surely you'll grow double : (st. 1)

Books! 'tis a dull and endless strife :
Come, hear the woodland linnet,
How sweet his music! on my life,
There's more of wisdom in it. (st. 3)

One impulse from a vernal wood
May teach you more of man,
Of moral evil and of good,
Than all the sages can. (st. 6)

要するに、科学や芸術、また、それらについて書かれた書物を全面的に否定しているのではなく、比較において、自然を体験することの優位、「賢い受け身」(“wise passiveness”)⁽⁶⁾の優位を主張しているだけなのである。

この詩の中で、本当に非難されているのは、我々人間の「おせっかいな知性」である。知性を過信して頭でっかちになった我々は、「解剖しようとして殺してしまう」という。

Our meddling intellect
Mis-shapes the beauteous forms of things : —
We murder to dissect. (st. 7)

ワーズワスが理性(reason)を重視しながらも、一切をこれで解明しようとする

Godwinism⁽⁷⁾を、激しく非難、攻撃したのと同様に、自らの知性を過大評価して、対象を「愛の精神でもって見よう」としない奢った態度に対する憤りが、ここには表明されている。

この奢った態度に対する憤りは、ワーズワスの科学批判の例として最も多く引用される“A Poet’s Epitaph”にも共通している。

この詩は、まず、「政治家」(“a Statist”) (st. 1), 「弁護士」(“A Lawyer”) (st. 2), 牧師 (“a Man of Purple cheer”) (st. 3), 「兵士」(“A soldier”) (st. 4) を、皮肉たっぷりに攻撃した後で――

Physician art thou? — one, all eyes,
 Philosopher! — a fingering slave,
 One that would peep and botanize
 Upon his mother’s grave? (st. 5)

――と、自然科学者(“Philosopher”⁽⁹⁾)を批判している。しかしながら、ここでも、非難されているのは、「全身これ目」(“all eyes”) といった執拗に観察し、解明することしか考えなかったり、「母親の墓の上」だというのに、「細かく探査したり、植物学の実施研究をしたりする／指でいじくりまわすことの奴隷」と化した自然科学者である。“The Tables Turned”の言葉を借りれば、「おせっかいな知性」に凝り固まって、平気で「解剖するために殺してしまう」ような非情で、奢った一部の科学者が、攻撃されているのである。

こうした不遜な態度に対する非難は、続く第7連の「モラリスト」の描写に、さらに明白に表れている。

A Moralist perchance appears ;
 Led, Heaven knows how ! to this poor sod ;
 And he has neither eyes nor ears ;
 Himself his world, and his own God ; (st. 7)

自分が正しいと信じて他人の意見など聴く耳を持たない (“he has neither eyes nor ears”)モラリストは、世界は自分のものだと信じ、自分こそその世界の「神」

だと信じ込んでいる。この上なく自信過剰で、傲慢な者の姿である。

それに対して、「詩人」は「控えめ」で、他人と共有できる喜びに「満足を覚える」存在である。

But who is He, with modest looks,
And clad in homely russet brown? (st.10)

He is retired as noontide dew,
Or fountain in a noon-day grove; (st.11)

Contented if he might enjoy
The things which others understand. (st.14)

この詩においても、ワーズワスの真意は、科学批判にあるのではなく、人間の力を過大評価して、必要以上に物事を解明しようとする態度を排斥し、あるがままの自然を眺めてそれを楽しみ、満足を覚えることの素晴らしさを、主張することにあつたのである。

M. H. Abrams は、*The Mirror and the Lump* の中で、次のように述べている。

We must not mistake Wordsworth's contempt, in his *Lyrical Ballads*, for the 'meddling intellect' which murders to dissect, and for the 'philosopher' who would peep and botanize on his mother's grave, for a general attack against science. Other passages make it clear that these lines are to be read only as his judgments against the fallacy of misplaced abstraction, and against the scientist whose laboratory habits are so indurate that he continues to analyze where only imagination and feeling are relevant.⁽¹⁰⁾

II *The Prelude* と科学

ワーズワスの科学に対する考え方を探るに際して、まず、詩人としてのワーズワスが、その生い立ちの中で、どのように科学と関わってきたかを、自伝的

長詩 *The Prelude, or Growth of a Poet's Mind* (1805-06)⁽¹¹⁾ を中心に、調べてみよ
うと思う。

科学に関する言及が最初に登場するのは、第3巻 “Residence at Cambridge”
中の、ケンブリッジ大学入学当時、学寮の寝室の窓から見た Isaac Newton
(1642-1727) の銅像についての描写である。

And from my bedroom, I in moonlight nights
Could see, right opposite, a few yards off
The antechapel, where the statue stood
Of Newton with his prism and silent face. (11. 56-9)

1850年版の *The Prelude* には、さらに次の2行が付け加えられている。

The marble index of mind for ever
Voyaging through strange seas of Thought, alone. (1850年版, 11.62-3)

晩年のワーズワスは、宗教的にも英国国教会に帰依するなど、保守化が顕著だ
と言われているが、この描写を見ると、彼のニュートンに対する尊敬の念は、
若い時の一時的な熱狂などではなく、晩年になって、かえって浄化され、高め
られているように思われる。

また、ワーズワスは、「科学」(science) という語を、天文学、化学、幾何学
(geometric science) など、広い意味で用いていたようであるが、*The Prelude* 第
5巻 “Books” では、「幾何学的真理」は「詩」と並んで、「永遠の生」を持つも
のとして語られている。

On poetry and geometric truth,
The knowledge that endures, upon these two,
And their high privilege of lasting life, (11. 64-6)

これに続く部分では、友人の話として、夢の中で「ユークリッド (Euclid) の幾
何学原本」と「詩集」とを持った一人のアラブ人が、次のように話すのを聞いた
というものがある。

The one (=‘Euclid’s Elements’) that held acquaintance with the stars,
 And wedded man to man by purest bond
 Of nature, undisturbed by space or time ; (11. 104-6)

第6巻“Cambridge and the Alps”には、52行(11. 135-87)にわたって、幾何学を学ぶことの喜びが語られている。この一節は、学生時代、ほんの初歩しか幾何学を勉強しなかったことを、「後悔」しながら、幾何学の勉強が、ワーズワスの心を「高揚させ、励まし、落ちつかせてくれる」ものであったという描写で始まる。

Yet must I not entirely overlook
 The pleasure gathered from the elements
 Of geometric science. I had stepped
 In these enquiries but a little way,
 No farther than the threshold ; with regret
 Sincere I mention this ; but there I found
 Enough to exalt, to cheer me and compose : (11. 135-41)

そして、幾何学について思いをはせることによって得られる喜びは、「静かで、より深い」ものであり、「唯一の卓越した生命」である神にもふさわしい一つのイメージを与えてくれるものであると、最高の賛辞を送る。

Yet from this source more frequently I drew
 A pleasure calm and deeper, a still sense
 Of permanent and universal sway
 And paramount endowment in the mind,
 An image not unworthy of the one
 Surpassing life (11. 150-5)

続いてワーズワスは、絶海の孤島に打ち上げられた人間が、運よく幾何学の論文(“A treatise of Geometry”)を1冊だけ、持っていたおかげで、砂の上に図

形を描いて悲しみをまぎらすことが出来たという逸話を語り、さらに、幾何学という「抽象観念の魅力」がいかに大きなものであったかを、繰り返し強調する。

Mighty is the charm

Of those abstractions to a mind (11. 178-9)

以上、科学的思考が、ワーズワスに喜びをもたらすものであったことが、様々な表現で語られていた訳であるが、ここで、その「喜び」の性質について、確認しておきたいと思う。

The Prelude 第6巻には――

. . . there I found
Enough to exalt, to cheer me and compose : (11. 140-1)

――とあったが、ワーズワスを「高揚させ、励ましてくれる」と共に、「落ちつかせてくれる」(“compose”)とある。幾何学的思考の喜びは、何か心を静め、「慰め」を与えてくれるような性質のものであったらしい。

Yet from this source more frequently I drew
A pleasure calm and deeper. (11. 150-1)

Transcendent peace

And silence did await upon these thoughts
That were a frequent comfort to my youth. (11. 157-9)

「慰め」という点では、第6巻中の、絶海の孤島で唯一人、図形を描いて悲しみをまぎらした人物の話もまた、幾何学的思考が慰めになるという一例であろう。

(One by shipwreck thrown) . . . draw his diagrams
With a long stick upon the sand, and thus
Did oft beguile his sorrow, and almost
Forget his feeling : (11. 171-4)

また、*The Prelude* の延長上にあると思われる “The Ruined Cottage” (1798)⁽¹³⁾ にも、寂しさをまぎらすために、「科学」に慰めを求める孤独な少年の姿が、描かれている。

... he lingur'd in the elements
Of science (11. 208-9)

... With these lonesome sciences he still
Continued to amuse the heavier hours
Of solitude, and solitary thought. (11. 218-20)

In vain he sought repose, in vain he turned,
To science for a cure
... at this time he scan'd the laws of light
With a strange pleasure of disquietude
Amid the din of torrents. (11. 228-32)

(最後の引用には、「光の法則」(“the laws of light”)まで登場している。)

この少年と同様に、ワーズワス自身も、彼の人生で最も危機的な精神状態にあった時、「数学」に慰めを求めている。ケンブリッジ大学時代、フランスに滞在したワーズワスは、その自由な革命精神に共鳴し、それが恐怖政治と化したことに、ひどく失望を感じている。また、それに加担している母国イギリスに対する愛国心との板挟みや、フランス女性 Annette Vallon との不幸な恋愛事件なども手伝って、ついに「絶望のうちに、道徳上の問題を放棄した」後、「明晰で堅固な」「数学」へと向かったことが、*The Prelude* 第10巻 “Residence in France” 中に述べられている。

I lost
All feeling of conviction, and, in fine,
Sick, wearied out with contrarieties,
Yielded up moral questions in despair,
And for my future studies, as the sole

Employment of the inquiring faculty,
 Turned towards mathematics, and their clear
 And solid evidence (11. 898-905)

以前からワーズワスの心を惹きつけて離さなかった数学（幾何学）のもつ「明晰さ」の魅力こそが、すべての確信を失ったワーズワスの、確かな心の拠り所となり、大きな慰めを与えてくれたのである。

And specially delightful unto me
 Was *that clear synthesis* built up aloft
 So gracefully. . . . (The Prelude, Bk, VI, 11. 181-3. イタリックは筆者)

III “Preface” と科学

ワーズワスが、科学について、そして科学と詩との関わりについて論じたものが、“Preface to *Lyrical Ballads*” (1802) (以下、“Preface” と話す) の中にある。そこで、内容的には、*The Prelude* と重複する部分も多いと思うが、ワーズワスの科学についての考え方を、今度は論理面から“Preface”をもとにして、追求してみたいと思う。

The Prelude 第5巻で、ワーズワスは、詩と科学的真理を一まとめにして、共に「永続する知識」であると語っていたが、“Preface”でも、両者は共通するものとして、扱われている。そして、科学と詩がもたらす知識は、「喜び」(“Pleasure”) に結びつくと考える。

The knowledge both of the Poet and the Man of Science is pleasure
 (par. 19)

この考え方は、*The Prelude* や“The Ruind Cottage”中の科学による喜びや慰めの描写の論理的説明である。

また、科学者も詩人も、共に、愛情をもって対象である個々の自然物に接すると説く。

. . . the Poet, prompted by this feeling of pleasure which accompanies him through the whole course of his studies, converses with general nature with affections akin to those, which . . . the Man of Science has raised up in himself, by conversing with those particular parts of nature which are the objects of his studies. (par. 19)

これが、科学者本来のあるべき姿だとすると、「A Poet's Epitaph」などで、攻撃の的にされていた科学者の非情で傲慢な態度は、当然、排斥されるべきものだということになる。

それでは、多くの共通点をもつ科学と詩は、どこに相違があるのだろうか？

The Man of Science seeks truth as a remote and unknown benefactor ; he cherishes and loves it in his solitude : the Poet, singing a song in which all human beings join with him, rejoices in the presence of truth as our visible friend and hourly companion. (par. 19)

科学者は、「孤独のうちに真理をいとおしむ」のに対して、詩人は、「すべての人間たち」と共に、真理を、常に身近にいる「友人」として楽しむ。つまり、科学が非常に「個人的」なものであるのに対して、詩は、万人が共有できる親しみやすいものなのである——そこに相違があるという。

そこで、ワーズワスは、両者の融合をはかり、科学を万人が共有できる親しみやすいものにしようと試みる。つまり、科学の研究対象に、想像力を働かせ、感情移入しようというのである。

If the labours of Men of Science should ever create any material revolution . . . the Poet will . . . be ready to follow the steps of the Man of Science . . . he will be at his side, *carrying sensation into the midst of the objects of the Science itself.* (par. 19, イタリックは筆者)

詩人の「感動を移入する」ことによって、科学の研究対象は、血肉を持ったものになり、詩の対象と同じになりうる。

The remotest discoveries of the Chemist, the Botanist, or Mineralogist, will be as proper objects of the Poet's art as any upon which it can be employed

(par. 19)

そんな考え方をもとに、ワーズワスは、科学が血肉を備えた存在になろうとする時には、詩人は喜んで手を貸すだろうと、将来についての展望を述べる。

If the time should ever come when what is now called Science . . . shall be ready to put on . . . a form of flesh and blood, the Poet will lend his divine spirit to aid the transfiguration, and will welcome the Being thus produced, as dear and genuine inmate of the household of man.

(par. 19)

こうして、詩は、科学の素晴らしさをも合わせ持つ卓越したものとなるのである。⁽¹⁴⁾

Poetry is the breath and finer spirit of all knowledge ; it is the impassioned expression which is in the countenance of all Science Poetry is the first and last of all knowledge — it is as immortal as the heart of man. (par. 19)

以上、ワーズワスは、「科学」を、最高の存在である「詩」と共に、尊重されるべきものであり、「詩」の次に位する優れたものであるとして、敬愛し、信頼していることが、明らかになった。しかしながら、これほどまでに「科学」を愛するワーズワスが、何故、批評家たちから「科学嫌い」のレッテルを、貼られるに至ったのだろうか？ それは、ワーズワスが科学を愛すればこそ、起こったことだと言えないだろうか。つまり、愛する科学が「誤用」されることに耐えきれず、その怒りを、詩に託したことによるのである。愛情と畏敬の念をもって眺めるべき自然物を、不遜で非情な態度で精査しようとする偽科学者を、ワーズワスは真っ向から糾弾する。その結果、「科学好き」が高じて、逆に「科学嫌い」との皮肉な誤解を受けてしまったのであろう。

Science then

Shall be a precious visitant ; and then,

And only then, be worthy of her name :
 For then her heart shall kindle ; her dull eye,
 Dull and inanimate, no more shall hang
 Chained to its object in brute slavery ;
 But taught with patient interest to watch
 The process of things, and serve the cause
 Of order and distinctness

(*The Excursion*, Bk. IV, 11. 1251-9)

IV ワーズワス詩中の科学的要素

科学的要素は、ワーズワス詩に、様々な形で登場している。そこで、科学的要素が顕著に表れているものから、拾ってみたいと思う。

まず、「科学の対象が詩の対象となっている」好例として、*The Prelude* 第1巻“Childhood and School Time”のスケート遊びの時の描写を取り上げよう。

冬、湖に張った氷の上を、少年ワーズワスは、スケート靴をはいて猛スピードで滑り、急に止まる。すると、周囲のごつごつした岩の崖が、いつまで動き続けるように感じられ、まるで地球の自転を見ているかのようなだったという。

. . . the solitary cliffs
 Wheeled by me—even as if the earth had rolled
 With visible motion her *diurnal* round!
 Behind me did they stretch in solemn train,
 Feebler and feebler, and I stood and watched
 Till all was tranquil as a dreamless sleep. (11. 484-91. イタリックは筆者)

地理の自転は、言うまでもなく、科学的真理である。しかし、ふだん、我々は地球が動いているなどと、実感することはできない。我々の眼に動いて見えるのは、大地ではなく、空の方なのだから。それはちょうど、電車などに乗っていて、本当に動いているのは自分の方なのに、窓の外の景色の方が動いて見

えるという錯覚と同じである。従って、この体験は、ふだんは知覚できない地球の自転という科学的宇宙像の一端を、周囲の岩々がぐるぐる廻って見えたことから、直感的に捉えた体験だと言えよう。また、ここで用いられている“diurnal”（日々の）という言葉は、ニュートンが用いていた天文学の用語であり、ニュートンの描いた宇宙像を、自らも捉えることができたというワーズワスの思いが、表現の仕方にも窺われる。

同じく、科学的説明がなされているものに、“Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey, on Revisiting the Banks of the Wye during a Tour, July 13, 1798”（以上、“Tintern Abbey”と記す）中の強烈なヴィジョン体験（a visionary experience）の描写がある。それは、肉体の生の機能が停止し、一種の仮死状態となって、自らもいわば物体の一部と化した時、「事物の生命」を見通す（“see into”）に至ったという体験である。

... the breath of this corporeal frame
 And even the motion of our human blood
 Almost suspended, we are laid asleep
 In body, and become a living soul :
 While with an eye made quiet by the power
 Of harmony, and the deep power of joy,
 We see into the life of things. (11. 43-9. イタリックは筆者)

「肉体 (corporeal frame) の呼吸も／…血液の」循環も「殆ど止まった」というのは、一種の金縛りのような状態を、言っているのではないかと思われるが、ここでも、ワーズワスは、その特異な体験を描写するのに、医学用語を用いた解説のような表現をとっている。科学的正確さを加味しようと、努めているのである。⁽¹⁵⁾

さて、科学的要素の顕著な例はこれくらいにして、今度は、ワーズワスの自然描写に潜んでいる科学的要素について、探ってみたいと思う。

The Prelude 第6巻によると、ワーズワスは、幾何学的思考でもって周囲の自然を眺めることを常とし、その法則の支配を受ける調和した自然の姿に、静か

な歎びを感じていたという。

With Indian awe and wonder, ignorance
Which even was cherished, did I meditate
Upon the alliance of those simple, pure
Proportions and relations with the frame
And laws of Nature

(11. 142-6)

従って、ワーズワスの自然描写は、科学的法則に従った調和した宇宙を、描いたものとなっている。例として、日本でもなじみ深い“I wandered lonely as a cloud” (1804) を、取り上げてみよう。

この詩は、ぼんやりと丘や谷をさまよっていた詩人が、黄水仙 (daffodils) の大群を見つけるところから始まる。その黄水仙は、初めばらばらに風に吹かれはためいていた (“Fluttering”) が、やがてそろって踊り (“dancing”) 始め、驚いて見つめるワーズワスの目の前で、みるみるうちに、「天の川」の「星々」にも例えられるべき、調和した宇宙の一部となる。

I wandered lonely as a cloud
That floats on high o'er vales and hills,
When all at once I saw a crowd,
A host, of golden daffodils ;
Beside the lake, beneath the trees,
Fluttering and *dancing* in the breeze.

Continuous as *the stars* that shine
And twinkle on *the milky way*,
They stretched in never-ending line
Along the margin of a bay :
Ten thousand saw I at a glance,
Tossing their heads in sprightly *dance*.

(sts. 1&2. イタリックは筆者)

こうして、宇宙の order (秩序) に組み込まれた黄水仙は、「歓び」に満ち溢れており、それを見つめる詩人も陽気にならざるをえない。

The waves beside them danced ; but they

Out-did the sparkling waves *in glee*:

A poet could not but be gay,

In such a jocund company :

(st. 3. イタリックは筆者)

そして、この時の黄水仙の思い出は、後に、ワーズワスの慰めとなる。

For oft, when on my couch I lie

In vacant or in pensive mood,

They flash upon that inward eye

Which is the bliss of solitude ;

And then my heart with pleasure fills,

And dances with the daffodils.

(st. 4)

ここでは、宇宙の order が、詩人の想像力によって「感動」を移入されることにより、歓ばしいものとなり、「癒やす力」(“healing power”)⁽¹⁶⁾を持つものとなっている。幾何学的思考のもたらす歓びや慰めに、通じるものがあることは、言うまでもない。

この種の宇宙の order についての言及は、殆どすべてのワーズワス詩の自然描写に、見出せる。そして、その静かな調和を象徴的に示すものとして、月や星⁽¹⁷⁾が登場している。

V 科学的要素とワーズワスの「自然」

科学的要素は、当然、ワーズワスの自然観にも、多大な影響を与えている。ワーズワスの「自然」像は、幼い頃特に頻繁だったという数々のヴィジョン体験を通して、自然との交わりを積み重ねることによって、徐々に完成していっ

たものと考えられるが、⁽¹⁸⁾ワーズワスの場合、そこに、科学的要素が入ってきているため、独特のものとなっている。

ワーズワスの「自然」は、初め、恐ろしい「規則的運動をする巨大な物体」として、登場する。*The Prelude* 第1巻の、真夜中の湖での体験が、その代表であろう。

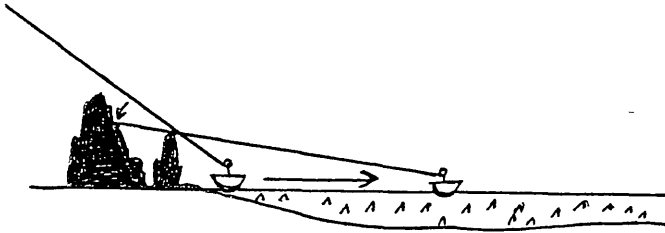
湖の岸から小舟を漕ぎ出したワーズワスは、一番高い峰の頂上に目を据えて、それを目印にしながら漕いでいった。ところが、その峰の背後から、真っ黒で巨大な峰が姿を現し、どんどん身の丈が大きくなりながら、まるで大股で追いかけてくるかのように見えたという。

... from behind that craggy Steep, till then
The bound of the horizon, a huge Cliff,
As if with voluntary power instinct,
Uprear'd its head. I struck, and struck again,
And, growing still in stature, the huge Cliff
Rose up between me and the stars, and still,
With measur'd motion, like a living thing,
Strode after me.

(11. 405-12)

ボートなどを漕ぐ時には、後ろ向きに進むわけだから、目印にしていたものの背後に、もっと背の高いものがあれば、遠ざかるにつれて、だんだん見えてくるのは、説明のつくことである(図参照)。そして、視界に入ってくる巨大な峰の大きさは、ワーズワスの漕ぐ小舟の速度に比例することになるから、恐ろしくなったワーズワスが、漕げば漕ぐほど巨峰の身の丈も、ますます増していくように見えたのも、道理である。

距離や高さ、速度などを計算してみれば、容易に解明できる現象ではあるけれども、真夜中の湖で、たった一人小舟を漕ぐ少年ワーズワスには、ぐんぐん大きくなっていく巨大な峰は、全くの死物とは思われず、何か今まで自分が知らなかった種類の生き物(“unknown modes of being”)が、この世にはいるのではないかという不安の種になる。



. . . after I had seen
 That spectacle, for many days, my brain
 Work'd with a dim and undetermin'd sense
 Of unknown modes of being . . .
 . . . huge and mighty Forms that do not live
 Like living men mov'd slowly through my mind
 By day and were the trouble of my dreams.

(11. 417-27)

一かき毎に、一定の速度をもった動きで(“measur'd motion”), 大きくなっていく巨峰, それは, 物理的法則に従って, 規則的運動を続ける物体のイメージである。その機械的な動きの中に, 感情移入することによって, ワーズワスは, 我々の理解する生とは異種の, 「生きている人間のように生きている」(“do not live/Like living men”) 生, いわば, 無機的物体のもつ「生」を, 予感したのである。

こうした「未知の存在形態」の知覚は, やがて, 周囲の無機物に対して感情移入することによって, それらが, まるで生きているかのように感じる——

To unorganic natures I transferr'd
 My own enjoyments, . . . I convers'd
 With things that really are

(The Prelude, Bk. II, 11. 410-3)

To every natural form, rock, fruit or flower,
 Even the loose stones that cover the high-way,
 I gave a moral life.

(*The Prelude*, Bk. III, 11. 124-6)

——といった体験を経た後、物理的な自然の法則に従って運動する一切の自然の形象 (forms) の上に広がる「大いなる実在」の認識へと、発展する。

I felt the *sentiment of Being* spread
 O'er all that moves and all that seemeth still ;
 O'er all that, lost beyond the reach of thought
 And human knowledge, to the human eye
 Invisible, yet liveth to the heart ;
 O'er all that leaps and runs, and shouts and sings,
 Or beats the gladsome air ; o'er all that glides
 Beneath the wave, yea, in the wave itself,
 And mighty depth of waters.

(*The Prelude*, Bk. II, 11. 420-8. イタリックは筆者)

And I have felt
 A *presence* that disturbs me with the joy
 Of elevated thoughts ; a sense sublime
 Of something far more deeply interfused,
 Whose dwelling is the light of setting suns,
 And the round ocean and the living air,
 And the blue sky, and in the mind of man :
 A motion and a spirit, that impels
 All thinking things, all objects of all thought,
 And rolls through all things.

("Tintern Abbey", 11. 93-102. イタリックは筆者)

表現は多少異なっているが、共に、物理的法則に支配された機械的な自然物の運動が、詩人の感情移入によって、ある種の生の喜びに満ちた躍動へと変貌しており、それを支配する「大いなる存在」の認識が、高らかにうたわれている。

そして、この「大いなる存在」をワーズワスは、「自然」と呼んでいるのである。

Ye Presences of Nature in the sky
Or on the earth! Ye Visions of the hills!
And Souls of lonely places!

(*The Prelude*, Bk. I, ll. 490-2)

結局、ワーズワスの「自然」とは、物理法則に従って運動する巨大な物体たちのもつ「生」の別名であるということになる。科学の支配する冷たい死の世界に、生の喜びを吹き込んでいるもの、それが「自然」なのである。

The Prelude 第13巻“Conclusion”には、ウェールズのスノードン山 (Mt. Snowdon) への徒歩旅行時の圧倒的なヴィジョン体験についての描写があるが、そこには、見渡す限り、一定の法則に従って止むことなく運動を続ける自然物の姿と、その産みの親である神秘的な「自然」が、象徴的に描かれている。

A hundred hills their dusky backs upheaved
All over this still ocean ; and beyond,
Far, far beyond, the vapours shot themselves,
In headlands, tongues, and promontory shapes,
Into the sea, the real sea, that seemed
To dwindle, and give up its majesty,
Usurped upon as far as sight could reach.
Meanwhile, the Moon looked down upon this show
In single glory, and we stood, the mist
Touching our very feet ; and from the shore
At distance not the third part of a mile

Was a blue chasm ; a fracture in the vapour,
 A deep and gloomy breathing-place through which
 Mounted the roar of waters, torrents, streams
 Innumerable, roaring with one voice !
 The universal spectacle throughout
 Was shaped for admiration and delight,
 Grand in itself alone, but *in that breach*
 Through which the homeless voice of waters rose,
That dark deep thoroughfare, had Nature lodged
 The soul, the imagination of the whole.

(11. 45-65. イタリックは筆者)

霧の海の暗くて深い裂け目で、よるべのない水音が立ち昇ってくるところに、「自然」が宿っているという。ワーズワスの「自然」は、この一節に象徴されるように、特理法則の支配を受ける事物の世界に住む神秘的な生きた霊であり、そのすべての無機物の運動に、生の息吹を与える「想像力」そのものなのである。⁽¹⁹⁾

VII 自然の法則と人間の生

ワーズワスの「自然」は、一切のものの上にあって、その法則に生を与える存在である。従って、人間の生も、自然の法則の支配を受けることになる。

人間の生死が、最も謎めいた形で、神秘的に描かれているのが、5篇の“Lucy” Poemsである。そこで、ワーズワスが、自然の法則の支配を受ける人間の生を、どのように捉えているかを、Lucyの生と死の描写を通して、探ってみようと思う。

最初の Lucy 詩，“Strange fits of passion have I known” (1799) では、語り手は、「夕べの月のもと」(“Beneath an evening moon”) (st. 2)、馬に乗って、恋人 Lucyのもとへ向かう。彼は、目を月に据えながら、どンドンペースを速めていくのだが……。

Upon the moon I fixed my eye,
All over the wide lea ;
With quickening pace my horse drew nigh
Those paths so dear to me. (st. 3)

野原を抜け、果樹園をへて、丘に達した時、沈みかけていた月は、Lucy のコテージにぐんぐん近づいていく。

And now we reached the orchard-plot ;
And, as we climbed the hill,
The sinking moon to Lucy's cot
Came near, and nearer still. (st. 4)

依然として、月に目を据えながら、恋人は、Lucy のもとへ急ぐ。

And all the while my eyes I kept
On the descending moon. (st. 5)

My horse moved on ; hoof after hoof
He raised, and never stopped : (st. 6)

すると突然、じっと見つめてきた月が、Lucy のコテージの屋根の向こうに、忽然として姿を消す。

When down behind the cottage roof,
At once, the bright moon dropped. (st. 6)

これを目のあたりに見た語り手は、ふと Lucy の死を、連想してしまう。

What fond and wayward thoughts will slide
Into a Lover's head !
"O mercy !" to myself I cried,
"If Lucy should be dead !" (st. 7)

ここで、ワーズワスは、語り手の Lucy の死に対する危惧の念を、恋ゆえの「愚かしい気まぐれな思い」と、表現してはいるけれども、当然の帰結として、ワーズワスが Lucy の死を、意図していたことは、かつて MS に、次のようなスタンザが、付け加えられていたことから、明らかである。

I told her this : her laughter light
Is ringing in my ear :
And when I think upon that night,
My eyes are dim with tears.⁽²⁰⁾

ワーズワスは、月が出て沈むのも、人間が生まれ、死んでいくのも、同じ法則に支配されていると考える。そうした人間の生と死に対するワーズワスの考え方を、恋ゆえの愚かな危惧——「情熱の奇妙な発作」(“Strange fits of passion”) (st. 1) ——という口実をもうけながらうたったのが、この詩だと言えよう。

二つ目の“Lucy”詩“*She dwelt among the untrodden ways*” (1799) では、少女 Lucy は、生前から苔むした石の傍に咲くすみれのように、また、空にただ一つ輝く星のように、宇宙の order を全く乱さない存在である。

A violet by a mossy stone
Half hidden from the eye!
—Fair as a star, when only one
Is shining in the sky. (st. 2)

やがて、Lucy は、人に知られぬまま、その短い生涯を閉じる。

She lived unknown, and few could know
When Lucy ceased to be ;
But she is in her grave, and, oh,
The difference to me ! (st. 3)

生前から、自然の調和を乱すことなく、その一部であるかのように、ひっそりと暮っていた Lucy は、死によって完全に、調和する宇宙の一部になったのであ

る。

この詩において、全く孤独な Lucy の生は、周囲の環境にすっかり溶け込み、調和を乱さないものとして描かれている。そこで、次の“Lucy”詩に進む前に、ワーズワスの「人間の生」の描き方について、ここでもう少し、同じような生の描写の例をあげながら、掘り下げてみたいと思う。

宇宙の order を乱すことなく、周囲の自然に全く調和し、まるでその一部であるかのような人間の姿を、ワーズワスは、数々描いている。

“To H. C., Six Years Old” (1802) では、少年の乗った小舟が、「天地が一つの心像 (imagery) をなす中空に、浮かんでいるかのようだ」と、表現されているし――

... thy boat

May rather seem

To brood on air than on an earthly stream ;

Suspended in a stream as clear as sky,

Where earth and heaven do make one imagery ; (11. 6-10)

――“Resolution and Independence” (1802) の非常に高齢な老人は、「高い丘の頂上」の「巨大な石」に、例えられている。

As a huge stone is sometimes seen to lie

Couched on the bald top of an eminence ; (st. 9)

Such seemed this Man, not all alive nor dead,

Nor all asleep (st. 10)

共に、周囲の自然に全く同化したかのような人間の姿である。

また、“Lucy” Poems の延長上にあると思われる“Lucy Gray, or Solitude” (1798) には、「月」に象徴される宇宙の order を、他人が気付かない昼間でさえ知覚する少女の姿が、描かれている。

The minster-clock has just struck two,

And youder is the moon !”

(st. 5)

これに関して、ワーズワスの友人 Crabb Robinson は、詩人の次のような発言を、記録している。

... He (= Wordsworth) represents the child as observing the day-moon, which no town or village girl would ever notice.⁽²¹⁾

また、“Lucy Gray”には、「孤独」(“Solitude”)という副題がついているが、ワーズワスは、この詩の執筆意図が、「全くの孤独」を表現することだったと、語っている。

... His (= Wordsworth's) object was to exhibit poetically entire solitude.⁽²²⁾

この Lucy Gray も、雪の夜に使いに出たまま、二度と戻らない。“Lucy” Poems 同様、早死する少女の一人である。

昼間の月を知覚し、「全くの孤独」のうちに早死する Lucy Gray と、“She dwelt among ...”のすみれや星に例えられ、人知れず生き、死んでいく Lucy には、大いに共通するものがある。人間の「生」の理想を、ワーズワスは、こんな風に捉えていたのかもしれない。

第3の“Lucy”詩“I travelled among unknown men” (1801)では、Lucy はもうこの世になく、思い出として語られている。思い出の中の Lucy は、暖炉の傍で「糸車」(“wheel”)を廻している。

And she I cherished turned her wheel

Beside an English fire.

(st. 3)

Lucy の廻す糸車、それは、運命の女神の廻す車輪 (Fortune's wheel) であり、生と死を繰り返す自然の法則の象徴でもある。その糸車の機械的な回転の中に、昼と夜の巡りも、当然、組み込まれている。

Thy mornings showed, thy nights concealed

The bowers where Lucy played ; (st. 4)

ここで、糸車を廻す Lucy は、自然の法則を紡ぎ出す「自然」そのものの象徴にも、なっている。

4 番目の“Lucy”詩 “Three years she grew in sun and shower” (1799) では、Lucy の育ての親として、ついに「自然」が登場する。

... Nature said, “A lovelier flower
On earth was never sown ;
This Child I to myself will take ;
She shall be mine, and I will make
A Lady of my own. (st. 1)

自らの理想の女性に育て上げようと、「自然」が選んだ少女 Lucy は、「自然」の教育によって、様々な自然物の表情を身につけていく。野山を駆けまわる小鹿 (fawn) のような生の喜びはもちろんのこと (st. 3), 嵐の中にある「優美さ」 (“Grace”) (st. 4) や、小川の「つぶやきから生まれる美」 (“beauty born of murmuring sound”) (st. 5) のような微妙が自然の美しさ、さらに、“She dwelt among ...” の少女が、すみれや星の静けさを身につけていたように、「口をきかない感覚のないものたちの沈黙と静けさ」 (the silence and the calm/Of mute insensate things”) (st. 3) や、「漂う雲」の「堂々とした姿」を自分のものとし (“The floating clouds their state lend/To her”) (st. 4), 宇宙の order を象徴する「真夜中の星」をも、愛しいものと感じるようになる。

“The stars of midnight shall be dear
To her ... (st. 5)

そして、ついに Lucy が、「立派な高さ」 (“stately height”) (st. 6) にまで成長した時、突然、彼女の「死」が語られる。

Thus Nature spake — The work was done —
How soon my Lucy’s race was run!

She died

(st. 7)

まるで、「死」が、教育の完成であるかのような「自然」の口調である。

「自然」の教育の目的、それは、究極的には、人間の生を静かな宇宙の order に、同化させることにある。そして、「死」によって完結する形をとる。「死」は、「自然」との合体に他ならず、その永遠の美の一部となること、つまり、一種の美の完成なのである。

人間の生死をも司どる「自然の法則」の荷い手としての「自然」が、その法則にのっとって行った教育こそ、Lucy の生であり、死だったと言えよう。

最後の“Lucy”詩、“A Slumber did my spirit seal” (1799) では、Lucy の「死」が、「動きも力もなく、聞くことも見ることもない」という、“Tintern Abbey”の仮死状態を連想させる表現で、描かれている。

No motion has she now, no force ;

She neither hears nor sees ;

(st. 2)

そして、死んだ Lucy は、「地球の日々の運行」に従って、「岩や石、木々と共に」廻っている。

Rolled round in earth's diurnal course,

With rocks, and stones, and trees.

(st. 2)

“diurnal”という言葉の使用からも明らかであるが、*The Prelude* 第1巻のスケート遊びの時に知覚した自転する地球のイメージが、再び登場している。

H. W. Garrod は、ワーズワスが、しばしば感情移入することによって、岩や石や木々が生きているかのように、感じるがあったという先に引用した *The Prelude* の一節 (Bk. III, 11. 124-6) を、引き合いに出して、この詩の Lucy は、本当は死んでいないのだと、指摘している。⁽²³⁾ 確かに、肉体上の「死」とは、ワーズワスが“Tintern abbey”に描いたヴィジョン体験に照らしてみると、肉体の「生」の機能が停止して、「事物の生命」(“the life of things”)と一体化することに他ならない。従って、この詩の自転する地球のイメージは、死んだ Lucy も

その一部となった機械的運動を続ける巨大な宇宙の生命体を、象徴的に描いたものだということになる。その生命体とは、科学的思考を交えながら、様々なヴィジョン体験を通して、ワーズワスが認識するに至った「自然」そのものであり、その究極的な姿が、ここに、人間の生死をも包含する形で、結晶している⁽²⁴⁾のである。

“Lucy” Poems は、短い5篇の詩群ながら、人間の生死を自然の法則が支配するというワーズワスの考え方を、明らかにしているばかりでなく、ワーズワスの「自然」そのものの科学的性格をも、はっきりとうち出している。誠に、密度の濃い作品群となっている。

結 び

以上、一般に、「科学嫌い」と言われるワーズワスが、実は、大変な「科学好き」であり、詩の表現に、しばしば科学用語を用いていること、また、その科学的精神は、彼の自然観、人間観に深い影響を及ぼし、スケールの大きな詩の表現を生んでいることを、考察してきた。ロマン派詩人の中でも、とかく保守⁽²⁵⁾的、旧時代的に思われがちなワーズワスが、実は、たいへん進取の精神に富み、自然の捉え方についても、非常に合理的な見方をしていたのだと言えよう。

最後に、ニュートンが、その「冷たい哲学」によって、^{プリズム}分光的色彩に還元し、「解きほぐして」(“Unweave”)しまったと、キーツを嘆かせた「虹」の美を、ワーズワスが、いかに受け止め、表現しているかを考察して、結びにしたいと思う。

ニュートンを崇拜するワーズワスであるから、キーツ以上に、ニュートンが虹を解析した事実を熟知していたことは、言うまでもない。しかし、自然を、愛情と畏怖の念をもって眺めるワーズワスの目には、虹の美は、少しも損われることなく映る。

My heart leaps up when I behold

A rainbow in the sky :

So was it when my life began ;

So is it now I am a man ;
 So be it when I shall grow old,
 Or let me die !

(11. 1-6)

子供の時も、成年になった今も、虹を見るとワーズワスの心は踊る。そして、その自然の美に感動する心が、これから先も、決して失われることのないようにと、ワーズワスは願う。ワーズワスの描く「虹」には、キーツのような嘆きは存在しない。ワーズワスにとって、科学的精神は、想像力を刺激して感動を深めてくれることはあっても、決して自然の美を破壊するものではないからである。

Admiration and love . . . are felt by men of real genius in proportion as their discoveries in *natural Philosophy* are enlarged ; and the *beauty* in form of a plant or an animal is not made less but *more apparent* as a whole *by more accurate insight* with its constituent properties and powers. (イタリックは筆者)⁽²⁶⁾

1842年10月、歴史画家 Benjamin Haydon (1786—1846) の晩餐会で、キーツは、「ニュートンの思い出に、困乱を！」と言って、乾杯の音頭をとった。この時、同席していた晩年のワーズワスは、控え目にではあるが、これを拒絶した⁽²⁷⁾という。

ワーズワスにとって、ニュートンは、後に数々の恩恵を与えてくれることになる科学的精神を、田舎から出てきたばかりの純朴な一大学生だったケンブリッジ時代に、初めて強烈に印象づけてくれた若き日の偶像であった。その「分光器」(“prism”)を携え、「沈黙」した姿は、「たった一人で見知らぬ思考の海を、永遠に航海」し続ける「精神」を導いてくれる「大理石の指標」として、いつまでも変わることなくワーズワスの心に刻まれ、尽きることのない尊敬と感謝を捧げるべき、永遠の英雄であり続ける。

Newton with his prism and silent face,
 The marble index of a mind for ever
 Voyaging through strange seas of Thought, alone.

(*The Prelude* 1850 年版, 11. 61-3)

ニュートン像に捧げられたこの短い詩行には、「科学」に対するワーズワスのこの上なく熱い思いが、凝縮されているように思われてならない。

Texts

The Poetical works of William Wordsworth (Oxford University Press, 5 vols., ed. Ernest de Selincourt & Helen Darbishire, 1940-9 ; vols. II, III & IV, 2nd ed., 1952-54)

The Prelude, or Growth of a Poet's Mind (Oxford Univ. Press, ed. E. de Selincourt, 1926, rev. ed. H. Darbishire, 1959)

The Poetical Works of John Keats (Oxford Univ. Press, ed. H. W. Garrod, 2nd ed., 1956)

Notes

- (1) Cf. I. A. Richards, *Science and Poetry* (Kegan Paul, 1935), chap. 5 "The Neutralization of Nature".
- (2) Thomas Love Peacock (1785—1866) は、*The Four Ages of Poetry* (1820) の中で、詩歌の歴史を、鉄・金・銀・真鍮の4段階に分け、文明の進展と共に詩歌は衰えると説いている。これに対する反駁として、P. B. Shelley が *A Defence of Poetry* (1820) を書いたことは有名である。
- (3) "Philosophy" (哲学) といっているのは、natural philosophy (自然哲学) のことで、今日の natural science (自然科学) を指す。
- (4) A. N. Whitehead, *Science and the Modern World* (Cambridge Univ. Press, 1927) p. 116.
- (5) Douglas Bush, *Science and Poetry* (Greenwood, 1950), p. 91. なお、Bush は唯一の例外として、*The Prelude* 第6巻の幾何学、天文学の描写をあげている。
- (6) Wordsworth, "Expostulation and Reply", st. 6.
- (7) ワーズワスは、1795-96年ごろ、一時的に William Godwin (1756-1836) (主著 *An Enquiry concerning the Principles of Political Justice*, 1793) に心酔するが、後に、その極端な合理主義を非難するようになる。"The Borderers" (1797) や *The Prelude* 第11巻には、Godwinism に対する批判が見られる。
- (8) Wordsworth, "Preface", par. 18.
- (9) See (3).
- (10) M. H. Abrams, *The Mirror and the Lump : Romantic Theory and the Critical Tradition* (Oxford Univ. Press, 1953) p. 309.

- (11) *The Prelude* (Oxford 版) には、1805-06 年版と 1850 年版の 2 種類のテキストがあるが、この論の引用は、断りのないものはすべて、1805-06 年版によっている。(なお、“Norton Critical Series”の *The Prelude* には、MS を独立させた 1798 年版も加えた 3 種類のテキストが、紹介されている。)
- (12) Cf. Wordsworth, “Preface”, pars. 18 & 19.
- (13) “The Ruined Cottage” は、後に、ワーズワスが、*The Prelude* に続く大作として、自らの半生を第三者的に物語ろうと試みた *The Recluse* (未完) の第 2 部をなす長詩 *The Excursion* (1814) に、組み入れられる。
- (14) *The Prelude* 第 5 巻にも、詩の幾何学に対する優位が、語られている。

... ‘and this,’ said he,
 ‘This other,’ pointing to the shell, ‘this book
 Is something of more worth’ (11.88-90)

The other that was a god, yea many gods,
 Had voices more than all the winds, and was
 A joy, a consolation, and a hope. (11.107-9)

- (15) ワーズワスは、ロマン派詩人らしくもなく、正確さを期すこと、また、それによって読者を納得させることに、熱心な詩人である。それは、度をこした場合、親友 S. T. Coleridge が指摘した “matter-of-factness”——真実味を出そうとして余計な事実を説明しすぎる——という欠点につながるものでもある。ワーズワスが、用語や表現の面で、科学的要素を持ち込みがちな点も、その一つの現われではないかと思われる。Cf. Samuel Taylor Coleridge, *Biographia Literaria* (Oxford Univ. Press, 2 vols, 1907) ch. 22.
- (16) Matthew Arnold, “Memorial Verses”, 1. 63, from *The Works of Matthew Arnold* (Macmillan, 1903, vol. I, *Poems*) p. 252.
- (17) Cf. Geoffrey Durrant, *Wordsworth and the Great System* (Cambridge Univ. Press, 1970) pp.7-8.
- (18) ヴィジョン体験については、学習院大学大学院英語英米文学研究会同人誌『クリティコス』第 2 号 (1982 年 3 月) 中の論文「ワーズワスのヴィジョン体験」で、既に論じている。
- (19) ワーズワスの自然観は、当時、主流であった 18 世紀的合理主義的機械論——宇宙を時計になぞらえるといったデカルト=ニュートンの世界観——が捉えた自然像とロマン派的有機体説を、合体させたものだと、考えられる。

- (20) Cf. *The Poetical Works of W. W.*, vol. II, p. 29, fn.
- (21) Henry Crabb Robinson, *Diary* for 11 September 1816. Cf. *The Poetical Works of W. W.*, Bk. I, p. 360.
- (22) Ibid.
- (23) Cf. H. W. Garrod, *The Profession of Poetry* (Oxford Univ. Press, 1929) pp. 84-5.
- (24) 「死」のテーマについては、『学習院大学文学部研究年報』第28号(昭和56年度)中の論文「ワーズワス詩中の『死』」で、既に論じている。
- (25) ワーズワスは、科学技術の進歩についても関心を示している。*The Excursion* (1814) 第8巻には、産業革命の影響に関して論じた箇所が見出されるし、また、“Steamboat, Viaducts, and Railways” (1833) というソネットを書いている。
- (26) Miss Isabella Fenwick が、晩年のワーズワスに対して行ったインタビュー(1847年)を、一般に“Fenwick Notes”と呼んでいるが、この引用は、“This Lawn, a carpet all alive” (1829) についての I. F. Note である。Cf. *The Poetical Works of W. W.*, vol. IV, p. 425.
- (27) Cf. Frederik Wordsworth Haydon, *Correspondence and Table-Talk with a Memoir by his Son* (Macmillan, 1876) Bk. II, 11. 54-5. なお、Benjamin Haydon は、多くの印象的なワーズワスの肖像画を描いている。